

第2章 京都大学病院構内A G14区の発掘調査

千葉 豊

1 調査の概要

本調査区は、京都大学病院構内の西部に位置する（図版1，図7）。ここに分子生物科学実験研究棟新営にともなって共同溝の設置が計画されたため、発掘調査を実施した。調査区周辺では、39地点で古代末の護岸跡、中世の井戸・溝、近世の道路・柵列〔京大埋文研81a〕、192・193地点で近世の道路・井戸・野壺を検出しており〔千葉・森下93〕、古代から中世・近世に至るこの地一帯の土地利用の変遷が問題となる場所であった。

発掘調査は、1992年3月6日に開始し、4月9日に終了した。調査面積は394㎡。調査区が2箇所に分かれているため、便宜的に東調査区と西調査区として記述する（図7）。調査の結果、管路や旧建物の基礎などによって、遺跡は大きく破壊されていたが、東調査区では平安後期の土坑・集石、西調査区では近世の道路・井戸・野壺・溝を検出した。中世まで、西調査区付近以西が高野川系流路の氾濫原に含まれ、古代末から開発の進んでいた東調査区や東に隣接する39地点とは土地利用の歴史が異なることが明らかとなった。

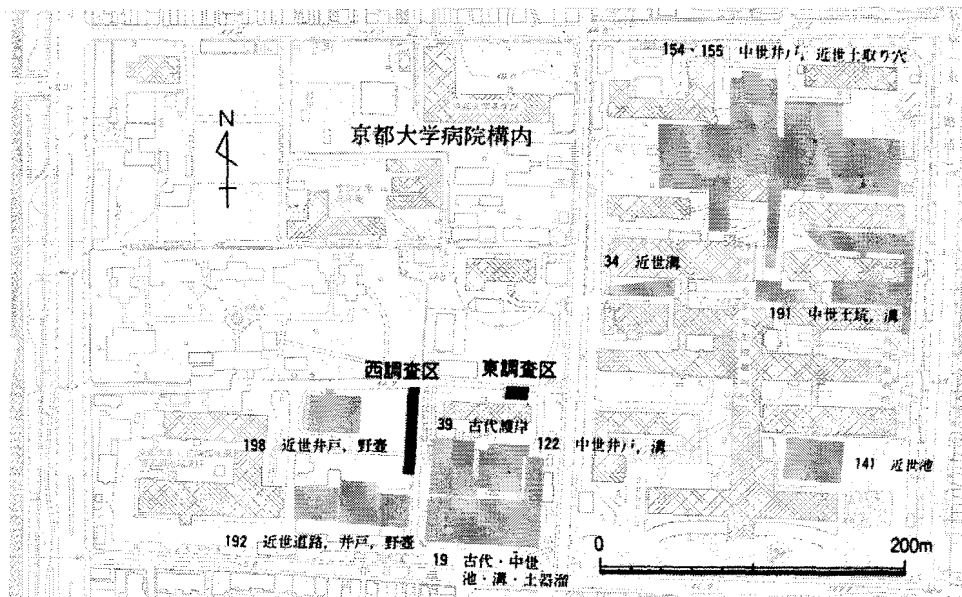


図7 調査区の位置と周辺の調査区 縮尺 1/5000

2 層 位

本調査区一帯は、東調査区東端で標高47.3m、西調査区南端で46.6mを測り、西へ向かって緩やかな傾斜をしめす。東調査区での基本層序は、上から順に表土（第1層）、黒色土（第2層）、黄灰色土（第6層）、青灰色シルト（第7層）、青灰色砂質土（第8層）と続く。黒色土と黄灰色土の間には部分的に、黄色土（第3層）、淡茶褐色粘質土（第4層）、茶褐色土（第5層）が堆積する。黒色土は近世後半の遺物を包含する。その東端の傾斜から判断して、Y=1769付近で南北方向に段差をなし、その東側は一段高くなっていたのであろうが、近代の削平によって失われたものとする。黄色土は黒色土が段差をなす部分にみられる。淡茶褐色粘質土は集石S X 1の広がる部分に覆いかぶさるようにみられる。遺物はほとんど出土していない。

茶褐色土は、Y=1769付近より東でみられるが、その西端は黄色土に切られており、近世の削平によって西側は失われたのだろう。12世紀後葉ごろの遺物を包含する。茶褐色土の下層に堆積する黄灰色土は、12世紀中葉ごろの遺物を包含する。調査区の東半では、黄灰色土上面で中世の土坑S K 1～S K 3、西半では、黄灰色土中より集石S X 1を検出した。黄灰色土の下層に堆積する青灰色シルト・青灰色砂質土からは遺物は出土しなかった。

西調査区での基本層序は、上から順に表土（第1層）、黒色土（第2層）、茶褐色砂礫（第10層）と続く。黒色土は近世の遺物を包含する。茶褐色砂礫は高野川系旧流路で、摩滅した中世の土師器を含む。この上面で道路・井戸・野壺・溝・柱穴など近世後半の遺構を多数検出した。道路S F 1の下層のみ青灰色砂礫（第9層）が堆積する。

3 遺 構

東調査区の遺構（図版2・図10） 東調査区で検出した遺構には、平安後期の集石、土坑がある。

集石S X 1 管路によって大きく破壊されていたが、調査区の西半、黄灰色土を掘り下げる過程で検出した。明確な掘形を確認することはできなかった。小児頭大から拳大の礫を用い、ほぼ南北方向にのびる。幅は4.5～5m前後。検出長は5mを測るが、南側、北側ともに調査区外へと続いている。遺物はほとんど出土していないが、2段撫でつまみ上げ手法C₄類の土師器皿小片が出土していること、および遺構の形成面である黄灰色土出土遺物から判断して、12世紀前葉ごろのものであろう。

遺 構

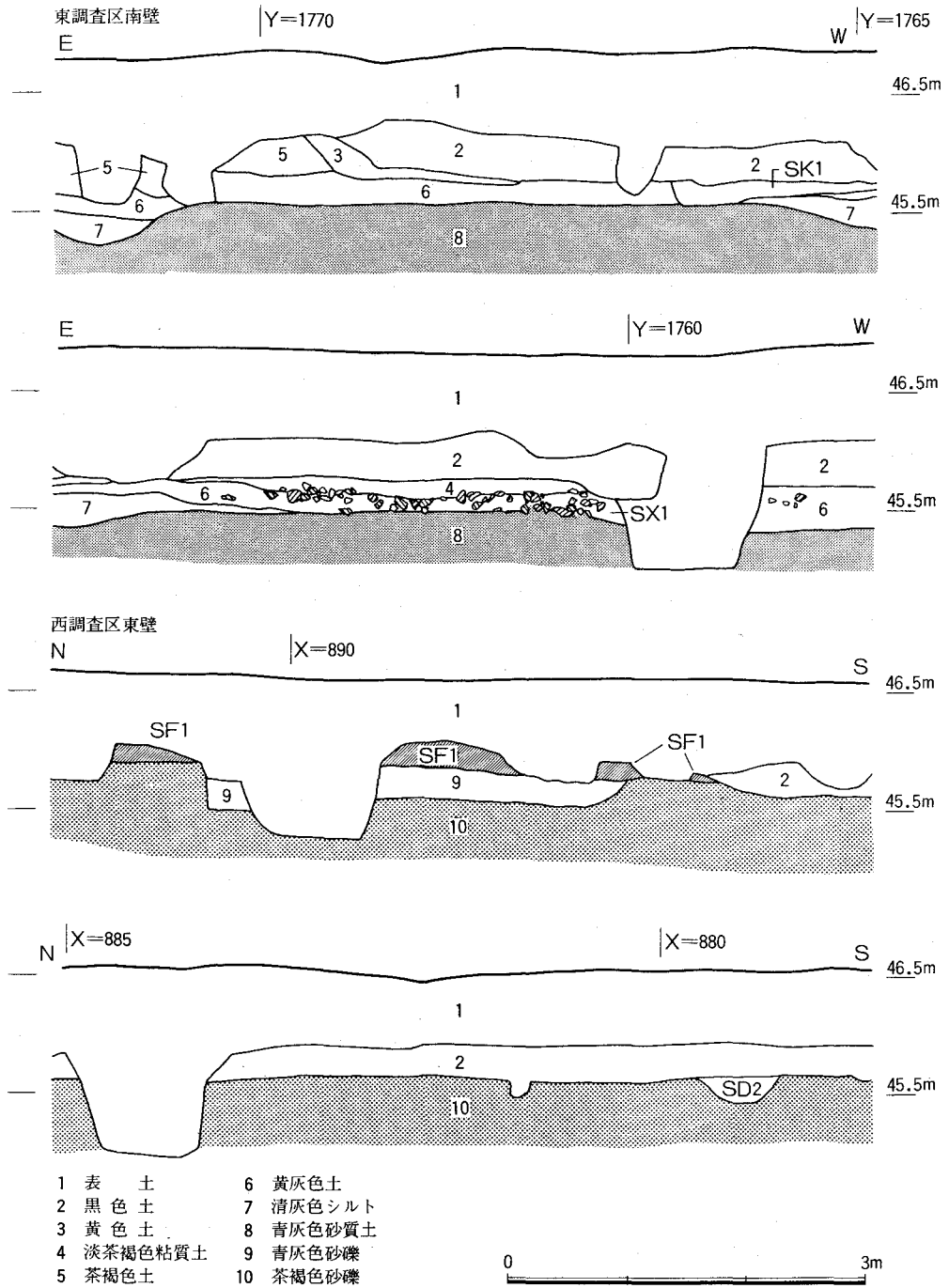


図 8 層 位 縮尺 1/60

土坑SK1～SK3 黄灰色土上面で検出した。SK1は調査区中央の南端に位置し、一部は調査区外へとびている。遺物は出土しなかった。SK2はSK1のすぐ東北側で検出した。一辺約1.2mの隅丸方形で、検出面からの深さは0.8mを測る。12世紀後葉ごろの土師器のほか、炭化物を多く含んでいた。SK3はSK2の東側2.5mの地点に位置する。径0.9mの円形で、検出面からの深さ0.9mを測る。12世紀後葉ごろの土師器皿や平瓦が出土した。

西調査区の遺構(図版2, 図9・11) 西調査区の遺構は、近世後半の道路SF1, 井戸SE1・SE3, 野壺SE2・SE4, 溝SD1・SD2がある。

道路SF1 X=890付近で、東南東から北北西にのびる。礫混じりの黄褐色土を叩きしめて造成されており、道幅は約4mを測る。

井戸SE1・SE3 SE1は調査区北辺で検出した。掘形円形の石組の井戸で、石組の最下段には大ぶりの石を縦置きしている。廃絶の時期は明治時代に下る。SE3はSF1の南側、調査区西端で検出した。掘形円形の石組の井戸で、水溜には円形の本桶を利用している。

野壺SE2・SE4 井戸SE3の東側に位置し、SE2がSE4を切っている。SE2が漆喰製、SE4が木製の野壺で、木製の野壺から漆喰製の野壺へと作り替えていることがわかる。

溝SD1・SD2 SD1は、X=910付近で、SD2は、X=880付近で検出した。ほぼ東西方向にはしる。耕作に関連するものであろう。

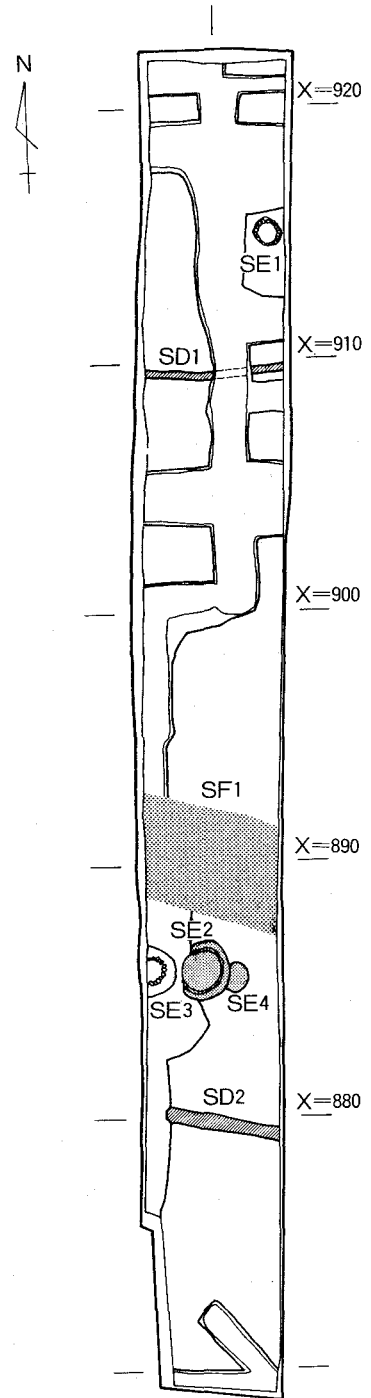


図9 西調査区の遺構 縮尺 1/300

遺 構

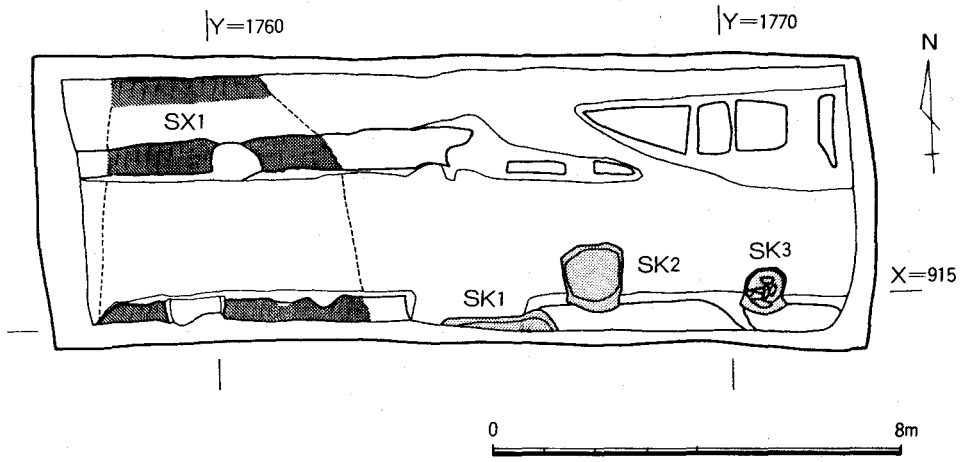


図10 東調査区の遺構 縮尺 1/150

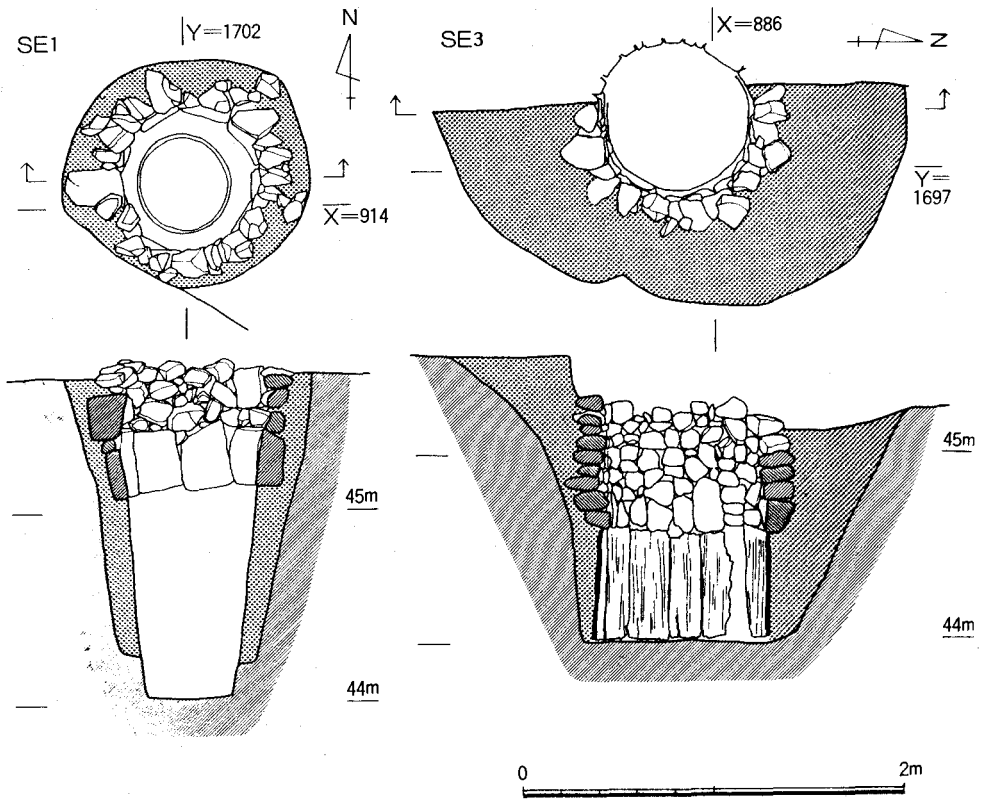


図11 井戸SE1・SE3 縮尺 1/40

4 遺 物

古代から近世に至る整理箱20箱の遺物が出土した。ここでは、東調査区から出土した平安後期の遺物と西調査区から出土した近世の遺物について記述する(図版3, 図12)。

東調査区出土遺物 (II 1～II 21) II 1～II 3は黄灰色土出土遺物。II 1は土師器皿。2段撫でつまみ上げ手法C₄類で、口径13.6cmを測る。II 2は須恵器すり鉢。口縁端面が外面とほぼ直角をなす。II 3は白磁碗。

II 4～II 10は茶褐色土出土の土師器皿。II 4・II 7～II 9は2段撫で素縁手法C₃類, II 5は2段撫でつまみ上げ手法C₄類, II 6・II 10は1段撫で面取り手法D₄類である。口径は, II 4～II 6が15cm, II 7・II 8が11cm, II 9が10cm, II 10が8cmを測る。

II 11～II 19はS K 2出土遺物。II 11～II 18は土師器皿。II 11・II 12は2段撫で素縁手法C₃類, II 15～II 17は1段撫で素縁手法D₂類, II 13・II 14・II 18は1段撫で面取り手法D₄類である。口径は, II 11～II 14が13.5～15cm, II 15～II 18が9～10cmの間におさまる。II 19は須恵器すり鉢。口縁端面が外面と鈍角をなし, わずかに肥厚する。底部外面に糸切り痕を残す。II 20・II 21はS K 3出土遺物。II 20は土師器皿で, 2段撫で面取り手法C₅類。II 21は灰釉系陶器皿。

以上の遺物は, 黄灰色土出土遺物が12世紀中葉ごろ, 茶褐色土出土遺物とS K 2・S K 3出土遺物が12世紀後葉ごろに位置付けられよう。

西調査区出土遺物 (II 22～II 34) II 22はS E 4出土の染付碗。くらわんか碗で, 草花文を描く。II 23～II 27はS E 2出土遺物。II 23は種類不明の土師質土器。黄白色を呈し, 轆轤整形で仕上げる。口径5.6cm, 最大径10.8cm, 器高2.1cmを測る偏平な形態である。II 24・II 25は染付碗。II 24は広東碗で, 内面の文様は墨弾きの技法による。焼き継ぎによる補修の跡がある。II 25は口縁部が端反りで, 内外面ともに麦藁手の文様を施している。II 26は染付蓋。外面には, 靈芝文を描いている。

II 28～II 32はS E 3出土遺物。II 28・II 29は土師器皿。II 30は染付碗。II 31は染付皿。内面は墨弾きの技法で, 文様を描く。焼き継ぎによる補修の跡がみられる。II 32は陶器仏花瓶。II 33・II 34はS E 1出土の土瓶。ともに丸形で上げ底の形態である。II 33は濃青色の釉を用いて竹に雀, II 34は緑色および黒色の釉を用いて文様を描いている。

S E 4出土遺物は18世紀後半, S E 2・S E 3出土遺物は幕末, S E 1出土遺物は幕末から明治にかけての時期のものであろう。

遺 物

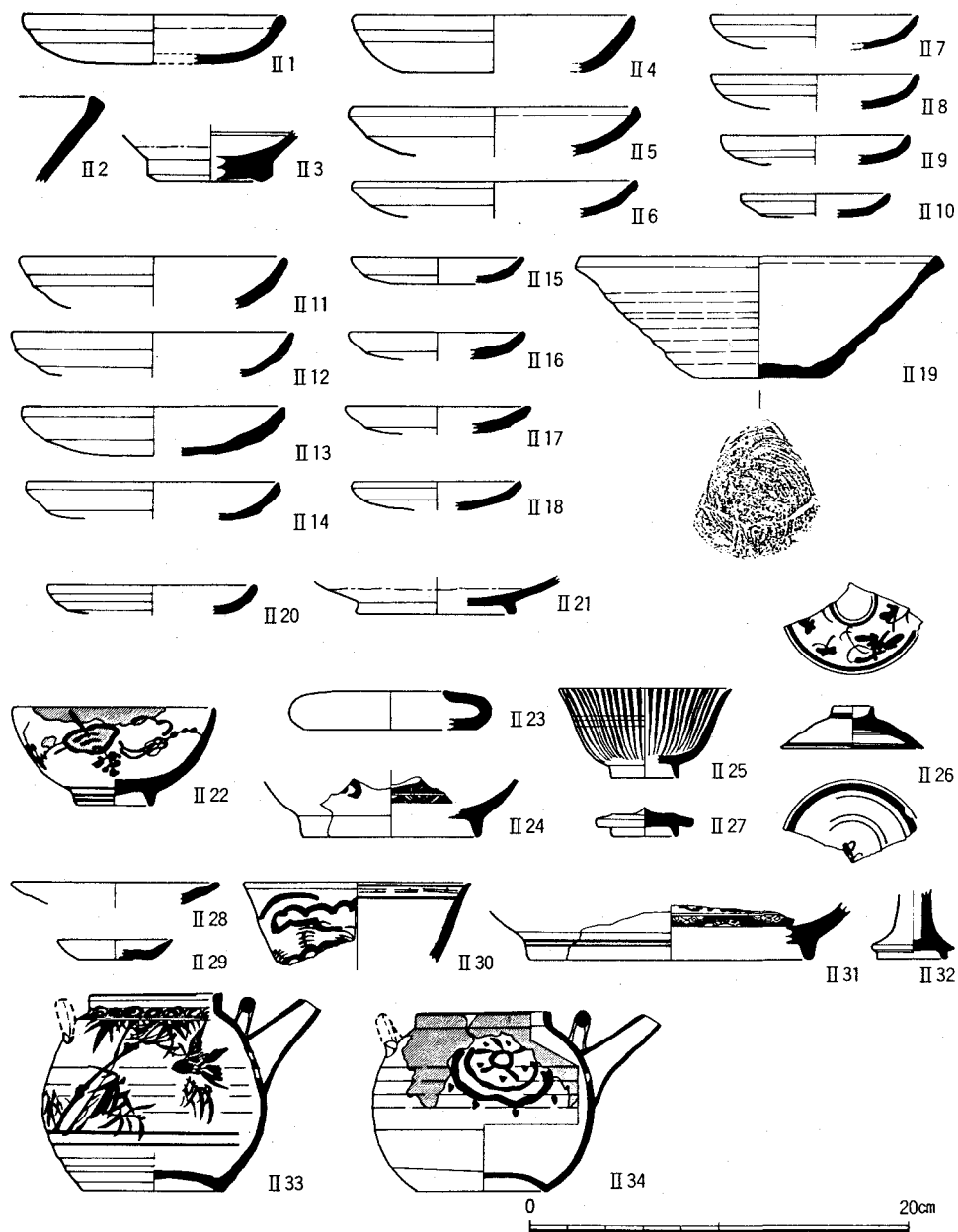


图12 黄灰色土出土遺物 (II 1 土師器, II 2 須恵器, II 3 白磁), 茶褐色土出土遺物 (II 4 ~ II 10 土師器), SK 2 出土遺物 (II 11 ~ II 18 土師器, II 19 須恵器), SK 3 出土遺物 (II 20 土師器, II 21 灰釉系陶器), SE 4 出土遺物 (II 22 染付), SE 2 出土遺物 (II 23 土師器, II 24 ~ II 26 染付, II 27 陶器), SE 3 出土遺物 (II 28 · II 29 土師器, II 30 · II 31 磁器, II 32 陶器), SE 1 出土遺物 (II 33 · II 34 染付)

5 小 結

調査の結果、東調査区と西調査区では土地利用の歴史に大きな違いがみとめられた。すなわち東調査区では、平安後期から土地利用が開始されるのに対して、西調査区では中世まで高野川系流路の氾濫原に含まれており、その地の開発が始まるのは近世後半を待たねばならなかったのである。このような調査結果は、西調査区の西に隣接する192・193地点で中世の遺物包含層がみられなかったこと、東に隣接する39地点で古代末に築かれたとみられる高野川系流路の護岸を検出していることと符合する事実といえる。

東調査区でみつかった平安後期の遺構は土坑3基と集石1基である。南へ約30 m離れた39地点では、この時期の井戸や溝が多数みつかっており、「白河北殿」の造営にかかわり、院政を支えた勢力が残した遺構と考えられている。本調査区で見つかった遺構も同様の性格をもつものと考えられ、白河北殿北辺一帯における遺跡の広がりをも明らかにする材料となろう。

西調査区でみつかった近世後半の道路S F 1は、東に隣接する39地点で検出された道路の西の延長部分に相当する。富岡鉄斎が安政～文久年間の聖護院村を描いた「聖護院村略図」〔京都市編85 口絵〕には、「黒谷道」(現、春日上通)から西北方向にのびる「車道」なる道が描かれており、39地点および今回の調査でみつかった道路は、この道にあたる可能性が高いと考えている。ただし富岡鉄斎が描いた道は、「車道」と記されているように車両の行き交う道路であったと想定される。だとすれば、近世白川道で検出されているように〔岡田・吉野80, 五十川ほか92〕、轍の跡が残っていてもよいと考えられるが、今回の調査でも、また39地点の調査でも、轍の痕跡はみられなかった。検出した道路が「車道」ではなく、「聖護院村略図」には描かれていない道路にあたる可能性も残されており、周辺地における今後の調査成果が期待される。道路脇でみつかった井戸と野壺は、隣接地である39・192・193地点でも同様な状況で多数見つかっており、この地一帯が近世後半には疎菜を生産する畑地として利用されていたことを物語るものである。

以上述べてきたように、今回の調査では、管路や旧建物の基礎等によって遺跡が大きく破壊されていたのにもかかわらず、この地一帯における古代から近世・近代に至る土地利用の変遷や歴史的景観を明らかにするうえで、貴重な資料を得ることができたといえよう。

なお本発掘調査は、筆者とともに森下章司氏があたり、本稿作成にあたっても多大なご援助をいただいた。末尾ながら、御礼申し上げます。